

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 65

もくじ

巻頭	中世史像の変化と鎌倉仏教(1)／平 雅行…………… 1
トピックス	激変した雇用環境と「労働教育」 激変した雇用環境のなか なにが求められているか／中西新太郎…………… 6 「労働教育」に求められているもの／前澤 檀…………… 9
シリーズ	地歴・公民科の授業づくり2 糸を紡ぎ、布を織る — 歴史の授業で「ものづくり」体験 ／鳥塚 義和…………… 12
図書紹介	…………… 16

巻頭

中世史像の変化と鎌倉仏教(1)

大阪大学大学院教授

平 雅行



(014) 日本史B新訂版 執筆者

1. はじめに

今日は、実教出版『日本史B新訂版』執筆者の一人として、私たちの教科書の特徴とその研究史的な背景について、お話しさせていただきます。

近年、歴史学の世界で日本中世史のイメージがずいぶん変わってきました。そのことが宗教史の領域にも深刻な影響を与えており、ここ30年ほどの間に中世宗教史は激変とってよいほどの変化をみせています。そしてこうした位置づけの変化が、今回の教科書にも反映されています。

とはいえ、教科書は個人の著作とは性格が大きく異なります。個人の著書であれば、思い切った議論を展開しても自分の責任ですむのですが、教科書ともなれば、書いてある中身や評価が教科書によって全く違うというのでは、教育現場を混乱させるだけです。また学界での議論が落ち着いていない段階で、

拙速に教科書に盛り込むようなことをすれば、数年ごとに記述がころころ変わってしまうことにもなりかねません。教科書叙述の改変には、議論の熟成を待つことが必要です。

しかも研究が熟成してからでも、あまり劇的に記述を変えてしまうと、教えづらい、使いづらいということになります。そのため、なかなかストレートに新しい見解を盛り込むことができず、旧来の考えと折り合いをつけながら、徐々に変えてゆくしかありません。その結果、ちょっと見ただけでは、何ができるように変わっているのか、よくわからないかも知れません。そこで今日は、教科書叙述の変化の背後に何があるのか、執筆者は何を意図しているのかを、お話ししたいと思います。

今回の実教出版『日本史B新訂版』の一つの特徴として、中世の始まりが鎌倉幕府からではなく、院政時代から始まっていることが挙げられます。中世という時代の成立を院政時代に求める考え方は、

1970年にはほぼ定説化していました。それから30年以上たっているのですから、今回の改変は執筆者の個人的な思いつきではなく、十分な熟成を踏まえた上での改変であることを、まずご理解ください。

さて、中世の叙述を、鎌倉幕府ではなく院政時代から始めるようになったというのは、中世の始まりが100年ほど早くなったというだけの話ではありません。鎌倉幕府の成立よりも、院政時代の方が、歴史的画期としては重大な意義をもつということです。鎌倉幕府の成立はもちろん重要な歴史的イベントですが、かつて私たちが想定していたほど重要とは考えなくなりました、ということです。そしてその評価が変化した背後には、中世の時代認識の劇的な変容があります。

もう一つ、この問題と密接に関係するのが鎌倉新仏教の問題です。私たちはこれまで、中世仏教というと鎌倉新仏教のことであり、その特徴は民衆仏教という点にあると論じてきました。しかし、こういう見方にもきびしい批判が投げかけられており、「鎌倉新仏教」の語が有害無益である、とまで言われています。今日はこのあたりの事情をお話したいと思います。

2. 岩波講座日本歴史

皆さんもご存じだと思いますが、『岩波講座 日本歴史』は、歴史学界を挙げて研究の成果を社会に還元しようという企画です。第二次大戦後に3回刊行されていて、それぞれの時代やテーマについて論じています。ですから、ここで取りあげているテーマや、叙述の変遷を比較すれば、研究潮流がどのように変化しているのか、鮮やかに見てとることができます。そこで、1962年に刊行された講座（1回目）と、1992年に刊行された講座（3回目）とを比較してみましょう。

62年の講座では「鎌倉幕府」「承久の乱」「鎌倉武士団の構造」といったテーマが立っていますが、92年の講座ではそれらはすべて消えていて、通史の概論で触れているだけです。このように幕府や武士団についての叙述が簡略化される一方、「院政と天皇」「公家政権と京都」「寺院と中世社会」「中世の家と女性」といった、新しいテーマが登場しています。中世という時代を幕府や武士だけでなく、朝廷・貴族・寺社をも含めた多元的な社会として捉え

ようとする姿勢が特徴的です。

テーマが同じでも、中身が全く異なるものもあります。鎌倉仏教論はその典型です。1962年の講座では川崎庸之氏が「鎌倉仏教」を執筆されました。目次をみると、「法然から親鸞へ」「栄西から道元へ」「日蓮の登場」となっており、この5人の思想家の教えと活動を概観しています。ここで取りあげられているのは、いわゆる鎌倉新仏教の祖師といわれる人たちだけです。旧仏教の叙述もなければ、明恵・貞慶といった復興運動も登場しません。つまり1960年代の鎌倉仏教論とは、鎌倉新仏教論のことでした。新仏教の話をするれば、鎌倉仏教の全体がわかると考えていた、そういう時代です。そしてそれは、鎌倉幕府を論ずれば中世国家がわかるという理解とも対応していました。

1992年の『岩波講座 日本通史』では、私が「鎌倉仏教論」を執筆しています。目次は「顕密仏教と中世社会」「顕密仏教と世俗権力」「鎌倉幕府の宗教政策」「顕密仏教と異端思想」となっており、法然・親鸞・道元・日蓮に触れているのは最後の項目だけです。そこで、法然らの思想と旧仏教とがどう違うのか、対比して説明しているだけで、頁数でいえば、新仏教の叙述は2～3割程度に過ぎません。圧倒的に旧仏教の話が中心です。

実をいえば、私はもともと法然や親鸞の思想研究から出発した研究者です。こういう講座ものでは、全体のバランスに配慮した叙述が求められますが、しかしそうは言っても、自分の専門の話を多く書き込みたいというのは人情です。どうしても引きずられてしまいます。つまり私のような法然・親鸞の専門家であっても、今の時点で鎌倉仏教全体を概観しようとするれば、ほとんどの頁を旧仏教に宛てざるを得ないのです。新仏教全体で2～3割というのは、まだこれでも多すぎるのかも知れません。

1962年の鎌倉仏教論では、旧仏教の話がゼロでした。それが今や旧仏教の話が7割を占めています。これは私と川崎さんとの個人的な考えの相違というよりは、ここ30年ほどの間の鎌倉仏教研究の激変ぶりを反映したものです。

ではなぜ、鎌倉仏教論の素材が、新仏教から旧仏教に大きく変化したのでしょうか。取りあげる素材の変化は、仏教史に対する見方の変容に原因があります。仏教史像が変化したため、取りあげる素材が変わったのです。そして、このような仏教史に対す

荘園領主(寺社・貴族)=古代的	←→	在地領主(武士)=中世的
朝廷・律令・京都=古代的	←→	幕府・貞永式目・鎌倉=中世的
旧仏教=古代的	←→	新仏教=中世的

る見方の変化の背後には、中世という時代の見方が大きく変わったことがあります。中世史像の変化が引き金となって仏教史像が変わり、それが素材の変化をもたらしたのです。

3. 中世史像の破綻

では、中世史像の変化とは一体何でしょうか。私たちは明治時代以来、日本の中世という時代を、単純明快に理解してきました。中世とは何か。「中世とは武士の時代だ」という考えです。中世には貴族や寺社も存在しているけれども、彼らは古代的存在であり、やがて消えていく人々である、そう考えました。

「中世は武士の時代だ」、この議論を経済史に応用すれば、「中世は在地領主制の時代」ということになります。荘園領主も存続しているけれども、古代勢力である彼らはやがて消えてゆくということです。この考えを権力論に適用すれば、「中世は幕府の時代」になります。朝廷の力もそれなりにあったが、やはり古代権力にすぎないということです。法制史だと、「中世は武家法の時代」になります。貞永式目を研究すれば中世法がわかると考えた。律令も改変されながらそれなりに機能していたけれども、古代法であるということで、見向きもされませんでした。都市論では、中世都市の典型が鎌倉に求められました。古代都市京都と鎌倉の相違点を抽出すれば、中世都市の特徴がわかると考えた。そして仏教史でも同様の議論が行われました。「中世は鎌倉新仏教の時代だ」。旧仏教もそれなりに力をもっていたが、彼らはやがて消えていく……。

上の表で言うと、左側の人々は古代的な勢力であり、やがて消えていく存在である。消えていく連中の研究をしても仕方がない。ということで、ほとんどの研究者は右側の研究をした。武士団の研究をし、在地領主制の研究をし、幕府、貞永式目、そして都市鎌倉の研究をし、鎌倉新仏教の研究をしたのです。これらの研究は同じ志向性をもっていました。その研究によって、中世が古代のなかから確立してゆく

様を描き出そうとしたのです。

ところが、こういう歴史像への批判は1950年代から提起されており、70年にはその破綻は学界の共通認識となります。先の図式の何が問題なのか。論点はいくつもありますが、一つだけ例を挙げておきましょう。私たちは左側の人々は古代勢力であり、やがて消えてゆくということに関心を払いませんでした。でも、消えてゆくはずの彼らは、実際にはいつまでも消え去りません。

左側の人々が没落し、衰退してゆくと言われるのは10世紀からです。将門・純友の乱が東西で起こったあたりから古代勢力の衰退が始まり、保元の乱で武士の時代となる。鎌倉幕府が成立すると古代勢力はますます衰退し、承久の乱でたまたきのめされて、天皇の地位まで幕府が決定するようになる。建武政権で何とか盛り返そうとしたけれども、室町幕府の登場によって朝廷の権力はさらに幕府に吸収されて、さらに一層衰退していった、という話になるわけです。

では、彼らはいつ消えるのか。荘園制の存続時期について意見は分かれています。大方の研究者は応仁の乱で荘園制が終わりを告げるとみています。ということは、10世紀前半から15世紀後半にいたるまで、左側の人々は500年以上の間、一貫して没落しつづけたということになります。徳川幕府ですら、その泰平はわずか250年です。500年以上も衰退しつづけるというのは、どういうことでしょうか。なぜ彼らはいつまでも消えないのでしょうか。

しかも普通に考えれば、古代が終わって中世が登場してくるはず。ところが日本の中世はたいへん奇妙な世界です。戦国時代、つまり近世への移行期にならないと古代が消えません。日本の中世社会では一貫して古代と中世が並存しつづけるという、訳のわからない話になっています。

確かに中世は武士の時代かも知れません。しかし他面では、中世は最後にいたるまで、武士の時代になりきれなかった時代でもあります。なぜでしょうか。なぜ、左側の勢力はいつまでもしぶとく生き残ったのでしょうか。その説明なしに中世を理解する

ことはできません。ということで、左側の研究が始まりました。そのなかで浮かび上がってきたのは、彼らの質的な変化です。

左側の人々は古代から存続していますが、中世への移行期に性格を変えています。つまり10～12世紀という古代から中世への転換期に、古代勢力は多大の犠牲を払いながらも、中世的な存在に生まれ変わっていたのです。つまり、右側だけが中世なのではありません。左側も中世の基幹的存在であったのです。

こうして研究の潮流は一変します。左側の人々はいつ、どのようにして、古代的存在から中世的存在へと生まれ変わっていったのか、そのことがわからなければ中世が解けません。若手の研究者は貴族の研究、寺社の研究、荘園領主の研究、朝廷の研究、律令の研究、京都の研究、そして旧仏教の研究へと向かいました。そして今や、左右双方を含めた全体的な構造の解明に議論は移っています。

4. 中世史像の再構築

これまでは、右側のお話をすれば中世が語れました。新仏教のお話をすれば鎌倉仏教のお話をしたことになりましたし、鎌倉幕府の政所や問注所は、まるで中世国家の政治機構であるかのような扱いを受けています。でも、そういう中世史像は終焉を迎えたのです。

もはや武家法の研究をするだけでは、中世法は分かりません。現実には中世法には武家法だけではなくて、公家法もありますし、寺には膨大な寺院法の世界が広がっています。武家法、公家法、寺院法、この三つを研究しなければ中世法はわかりません。

権力論のレベルでも、幕府だけでは話が片付きません。平氏や源氏といった武士団、彼らの社会的実態は今でいえば暴力団そのものですが、しかし暴力団が国を統治するというのは、生やさしいことではないはずで、ウラ社会ならともかく、オモテの世界に君臨するには政治的な正当性の獲得が不可欠です。中世の武士は天皇のための軍隊、仏法を守るための武力というお墨付きなしに存立することはできませんでした。日本中世は未開の社会ではありません。武力だけでのさばれるほど、単純な世界ではないのです。

こうなると、教科書に取りあげる素材も今後変えてゆく必要があるでしょう。たとえば地頭の荘園侵

略。これまでの教科書でこれが大きく取りあげられてきたのは、地頭を中世、荘園領主を古代と考えていたからです。この図式のもとでは、地頭の荘園侵略とは、中世による古代の打倒に他なりません。ですから私たちは、地頭と荘園領主との対立関係、幕府と朝廷との対立関係をことさらに強調し、地頭や幕府の勢力拡大に大きな関心を寄せたのです。

でも、現実には地頭と荘園領主は、日常的に協力しあいながら民衆を支配していましたし、彼らはいずれも中世的な領主そのものです。その点からすれば、地頭の荘園侵略とは、領主内部での分け前が少し変化したというだけの話です。教科書に取りあげなければならぬような話でしょうか。私たちが語るべきは、彼らの対立関係ではない。朝廷と幕府と寺社がいかに協力しあいながら、民衆支配を実現していたか、その構造を語らなければなりません。

5. 鎌倉新仏教は中世仏教か

以上述べてきたような中世史像の変化は、鎌倉仏教論にも深刻な反省を促しました。延暦寺や興福寺といった荘園領主は、古代勢力ではなく、中世の基幹的存在に変化したからです。となれば旧仏教の見直しは必至です。1975年に黒田俊雄氏が発表した^{けんみつ}顕密体制論は、その観点からする根源的な問題提起でした。

私たちはこれまで、法然、親鸞、道元、日蓮の思想を中世仏教と捉えてきました。その理由は、旧仏教とは違った思想の新鮮さがあったからです。確かに彼らの思想は斬新です。でも、新しければそれだけで中世的と言ってよいのでしょうか。彼らの教えは果たして中世社会に広まったのでしょうか。結論をいえば、ほとんど影響力はありません。

中世では念仏や阿弥陀信仰、また法華経信仰は、貴族から民衆にいたるまで広汎なひろがりをもっていました。しかしそれと鎌倉新仏教とは直接の関係はありません。なぜなら、それらの信仰のほとんどは、旧仏教の念仏信仰、旧仏教の阿弥陀信仰、旧仏教の法華経信仰であって、法然・親鸞や日蓮のそれではありません。彼らは念仏信仰や法華経信仰の枠内においてすら、全くの少数派でした。浄土真宗や日蓮宗・曹洞宗が社会的な意味合いを持つようになるのは戦国時代に入ってからです。戦国時代に仏教界でも下剋上がおこって爆発的に発展してゆきます

が、それ以前はほとんど影響力はありません。中世社会に受容されなかった思想を、中世仏教と呼んでよいのでしょうか。

一方、旧仏教は社会的にも、文化的にも、大きな影響力をもっていました。たとえば国家祈祷。旧仏教は鎮護国家と五穀豊穰の祈りを行っています。国の平和と経済的な繁栄を祈りの力で実現するという事です。中世は発展したとはいえ、まだまだ技術水準が低く、生産活動は自然の変動に翻弄されていました。灌漑設備や農業技術が発達すれば、少しぐらい雨が足りなくても、また少しぐらい雨が降りすぎても耐えられますが、中世の農業はその点、まだまだ脆弱でした。とすれば、何とかして、この気まぐれな自然（神）をコントロールしたいと願うでしょう。自然の順調な推移を祈る民衆の切なる願いが、国家祈祷の存立基盤でした。実際、豊作祈願の仏神事は、興福寺や延暦寺のような権門寺院から、地方の一宮や有力寺社、さらに荘園鎮守から村のお堂や社に至るまで、全国一斉に行われています。

延暦寺や興福寺は民衆と無縁な貴族仏教だったではありません。彼らは全国に末寺末社のネットワークを張り巡らしており、村のお堂や社は旧仏教の毛細管の役割を果たしていました。今からすれば荒唐無稽なお祈りですが、しかしこの祈りは効き目があると民衆も信じていたし、貴族たちもそう考えていました。当時の社会では、その祈祷は一種の農業振興政策と受けとめられたのです。日本中世が旧仏教を不可欠とした理由がここに 있습니다。旧仏教は中世の民衆生活と密接に関わっていました。

旧仏教の寺院は、中世の知識体系の結節点でもありました。たとえば中世の延暦寺で、どういう学問を扱っていたかという、天台・真言宗から法相・三論宗、さらには浄土宗や禪宗に至るまで、ありとあらゆる仏教宗派の教えを教授しています。諸宗兼学といって、旧仏教の僧侶は基礎的教養として、いろんな宗派の勉強をするのが普通でした。

それだけではありません。和歌、儒学から農学・医学・兵法・天文学・土木技術にいたるまで、さまざまな学問を教えています。延暦寺はこれだけのスタッフを擁していたのです。ヨーロッパの大学の起源が教会にあったのと同様に、中世延暦寺は一種の総合大学のような存在でした。旧仏教の寺院は知識・文化の宝庫だったのです。

新古今の世界を構築した歌人に、藤原俊成としなりがいま

す。藤原定家の父親ですが、この俊成は『古来風躰抄』という書物を著して、あるべき和歌の姿を論じています。注目すべきは、俊成がこの書物の理論のベースに天台止観しかんの教えを援用している事実です。中世では和歌と仏道の一致が盛んに唱えられますが、新古今の世界のバックボーンは天台宗の教えでした。このほか、中世天皇の即位に即位灌頂かんじょうという密教儀礼が導入されましたし、歴史観や神祇観も仏教化が進みました。モンゴル襲来後には、伊勢神宮にまで神宮寺が建てられ神仏習合の波が及んでいます。さらに女性に対する差別や、被差別人に対する差別も、仏教の教えで正当化しています。

このように、光の部分も、影の部分も含めて、旧仏教は中世社会のあらゆる領域に大きな影響を与えています。中世の旧仏教や延暦寺の強靱さを、軍勢力や経済力で説明するのは、その本質を見誤ってしまうでしょう。旧仏教の本当の強さは、その文化的影響力、ソフトパワーにあったのです。

このように旧仏教は、中世社会に不可欠な存在です。旧仏教に触れることなしに、中世の文化・美術はもとより、国家・経済・法・政治について論ずることはできません。私が鎌倉仏教論の7割を旧仏教の叙述にあてたのは、そのためです。旧仏教を狭い意味での宗教と考えるはなりません。中世社会を貫く文化体系が旧仏教なのです。旧仏教は中世社会のありとあらゆる領域に浸潤しています。中世は宗教の時代、仏教の時代でした。旧仏教は中世仏教そのものです。

日本の中世社会を、幕府と武士と鎌倉新仏教で把握しようとする見方は、中世の実態とは甚だしく乖離しています。そこで次に、鎌倉仏教をどのように捉え直せばよいのか、改めて考えてみましょう。

(以下、次号)

本稿は「『日本史B』意見交換会」(2007年4月28日)の講演会の内容に適宜追加・修正を加えたものです。